日々をゆく

# 日々をゆく

**EntsCat**

**https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20732622**

モ腐サイコ100, モブ霊, 男性妊娠

ポチリさんお誕生日おめでとうございます！🎉捧げ物の総受け『では無い』モブ霊です。今回は全年齢、男性妊娠が有ります。
良ければお付き合いください🌸

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

# Table of Contents

# 日々をゆく

カーテンから漏れる光で目が覚める。
いつしか気恥ずかしさが勝つようになって、僕は師匠に背を向けて眠るようになった。
抱きしめて顔を見ていると……別の欲が首をもたげるのも、あるけれど。
「おはようございます、師匠」
朝の光に照らされて、キラキラと眩しく師匠の髪が光る。
あ、また白髪が一本増えてる。
師匠は怒るけれど、僕は師匠の白髪を数えるのが好きだった。
ちょっとずつ増えていくのが嬉しい。それは僕たちがずっと一緒にいたことの、僕の中での自信になるから。
「おはよう……」
のそのそとベッドから出た師匠が、インスタントコーヒーをミネラルウォーターで作ってくれる。僕は食パンを２枚、トースターに入れた。
「モブ、今日は何時？」
「遅くなるんで、外で食べましょう。またメールするんで」
「ん」
背を向けたまま頷く師匠をじっと見つめる。
透明な朝の空気の中に、当然のように師匠がいる。ここに住んでいる。そしてその空気の中に僕も、住んでいる。
それを確認して、胸いっぱいに空気を吸って。
軽く頭を振った僕はゴソゴソとスーツに着替え始めた。

※

「おはよう、影山さん」
「おはようございます」
僕はパソコンの電源をつけ、メールチェックをしていた。
と、部長からチャットで『来週出張お願いしてもいいですか』と

メッセージが来た。『構いませんよ』『いつもお願いしてすみません』そんなやりとりをする。
血液検査の機械の技術営業。全国の病院に商品を納品しているので、技術営業の僕は子供がいないのもあり、技術者さんたちのサポートで飛び回っていた。それでも既婚者だから海外出張は無いから、マシな方である。
師匠には秘密にしていたんだけれど、僕が内定を全然貰えなかったのは、『僕は男性と結婚していて、一緒にくらしています。制度的なことは難しいにしても、例えばパートナーが病気になった時に、ちゃんと『家族』が大変なんだと扱って頂けますか』と正直に面接で訊いていたからだ。殆どの会社は『難しい』と言ったし、『男性と付き合っているのは伏せてくれないか』と言ってきた会社もあった。でもこの会社だけは、『ちゃんと既婚者として扱う、パートナー届けを出した事が確認できる書類があれば、制度上も配偶者として扱う』と言ってくれたのだ。
僕は喜んで入社した。そしたら、びっくりするほどホワイトな上に、給料も福利厚生も良かった。トメさんにきいたら、『それだけ人権意識が高い会社なら、他の条件もおして知るべし』と言った。すごく就職活動に苦労したので師匠は否定するだろうけど、僕は師匠のおかげで、とてもいい会社に入れたのだ。
師匠と出会ってから、僕はずっとツイている。師匠は能力無いって言ってたけど、座敷童っぽい能力とか持ってるんじゃないか、と僕はちょっと疑っている。
結婚してからはドラマチックなことは無いけれども、僕は平和で——満ち足りた日々を送っていた。
「あれ」
珍しい。芹沢さんからの着信だ。緊急なら大体師匠から電話が来るのに。
「お久しぶりです。どうしましたか」
営業の良いところは、自席で電話しててもお咎め無しな所だなあ。
『……っ、ごめんね、霊幻さんからは、言うなって言われてたんだけど、２ヶ月前から、霊幻さん、調子が悪くなることがあって……』

「え」
目の前が遠くなる。ドッドッドッ、と心臓が嫌な感じに早くなった。
『今日は、流石に、影山くんに黙ってる訳にはいかない、って、俺の独断で……。その、霊幻さん、うずくまって、立てなくなっちゃって……』
「今すぐ行きます」
思わず立ち上がってネームタグをバチっとモニターに当ててしまう。
電話を切ってから場所を聞いていなかったと顔をしかめた。でも問題ないだろう。調味市の方角で大きな力が２つあるところが、芹沢さんとエクボのいるところだ。
そこに師匠もいる。
「すみません、配偶者が仕事中に倒れたらしくって」
「行っておいで、勤怠の処理はしておきますから」
少し心配そうな顔で部長が言ってくれる。
僕は会社の屋上に駆け上がって、泣きそうな気持ちを必死に飲み込みながら、一気に上空に飛び上がった。
２つの力に向かって飛んで行こうとして。

「「うわっ！？！？」」

病院にテレポートしてしまった。芹沢さんとエクボがめちゃくちゃ驚いている。
「シゲオ、テレポートなんてできるようになったのか！？」
「なんかできちゃった。師匠は！？」
「お前、ますます力が強くなるな……」
「この間は、なんかヤバそうな禁足地を根こそぎ吹っ飛ばしてたし……あ、それより、霊幻さんなんだけど……」
芹沢さんが指差したカーテンの向こうに慌てて行く。
唇まで真っ青になった師匠に、ヒュッと喉が鳴った。
「ごめん、モブ……」
足元がくらくらする。まさか、師匠、僕を、置いて、

「あかちゃんできた……」
ぽーん！と暗いものが吹っ飛んでいった。
「や、やった……」
取り敢えず本音が漏れる。いけない、師匠からしたら、大変なことなのに……！
「よ、よろこんで、くれるのか？」
「師匠の身体が大変なこと、喜んじゃいけないって分かってるんですが……めちゃくちゃっ、嬉しいです……！！」
思わずふわふわと師匠を浮かせてしまう。色んな気持ちがぐわっと押し寄せてくる。男の子かな、女の子かな、お金の相談しないと、師匠の身体大丈夫かな、相談所どうするか芹沢さんと相談しないと、……それに。
こういうの良くないから、言わないけど。
師匠を妊娠させたことで、『僕のモノだ』って、ちょっとイケナイ嬉しさも、感じてしまった。
「パートナーの方ですか」
緊張した顔でお医者さんが声をかけてくる。
「お話があります」
僕は緊張と恐怖を思い出した。多分僕が無意識に、師匠に子宮を作っちゃったんだ。

ありえない妊娠、それがもたらすことを考えると、おそろしくてたまらない。

「影山さんの妊娠にはちょっと問題がありまして」
「……はい」
僕は情け無くも、縋るように師匠の手を握った。

「……初産が高齢出産になる、と言うことです」

力が抜けた。
「子宮とかに問題がある、とかは……」
「ああ、それは大丈夫です。こちらもびっくりしたので徹底的に検

査させていただいたのですが、産道が狭いので帝王切開しなくてはいけないこと以外は、至って妊娠は順調です」
僕は嬉しくなって師匠の頬にキスしてしまった。
「ちょっ、お医者さん驚くから！！」
「安心してください、エコーで影山さんのお腹に赤ちゃんが見えた時以上の驚きは無いんで。大学病院の方に紹介状を書きますね。研究にご協力を。……ではもう一回子宮の状態を確認しますので、配偶者の方は廊下に出ていてください」
僕は今度は師匠をやわく抱きしめてから、廊下に出る。
「影山くん……その、驚いたとは思うんだけど……」
「世界が輝いてる！！」
思わず両手を突き上げると、芹沢さんとエクボはほっとしていた。
「霊幻のやつ、こっそり堕ろすとか１人で育てるとか騒ぐから、見かねて芹沢が電話したんだ。正解だったみたいだな」
「？師匠、混乱してたんだね」
「はは……」
芹沢さんが疲れたように笑っていた。僕の師匠が迷惑をかけたようで、申し訳ない。
「僕もパパかぁ……！」
凄い、幸せってこんなに続くんだ……！

次から次に幸せを積み上げて。

僕は師匠と、そして我が子と。

幸せな日々を生く。

……そして。

「今回も俺たち、いい働きしたな……！」

思わずガッツポーズをし合った２人は。

今日も日々を征く。

終